

譯注

董康『書舶庸譚』九卷本譯注（五）

芳村弘道

書舶庸譚卷七〔民國二十三年（昭和九年、一九三四年、甲戌）一月一日～十四日〕

二十三年一月一日【原注：〔陰曆〕十一月十六日】

晴れ。明け方、投宿先の主人が膳を設けて屠蘇を客にふるまう。司法部編輯の董其鳴、申保および長男の妻劉徳如の書簡を受け取る。其鳴は江西の玉山（江西省上饒市玉山縣）の人で、みずから廬陵（江西省吉安市）の出身であるという。余の始祖と籍貫が同じであるので、家譜を取り出して見てもらった。この書簡によると、家系は江都（江蘇省揚州市）の流れに出て、ついで廬陵に移住し、また玉山に移ったとのこと。また家譜に「一支流が武進（江蘇省常州市）に移った云々」とあるという。董氏は廬陵に發源するが、その證據として江蘇の溧陽（常州市溧陽縣級市）や浙江の慈谿（寧波市慈谿縣級市）が皆同系であることが挙げられる。ただ余が家は宋代に廬陵から吳江（江蘇省蘇州市吳江縣級市）に移り、元代になって始めて武進に移ったのであって、直接に移ってきたのではない。

二日

晴れ。年賀狀がたくさん届く。余は執筆のため閑がなく、じっくり見られない。晝に長澤〔規矩也〕、田中〔慶太郎〕が相次いで來談。

三日

晴れ。夕方に野本〔白雲〕が村田とともに來訪、綠風莊^①に行き夜宴に招待してくれる。道すがら田中に年始の挨拶。連れ出して一緒に行きたかったが、すこし加減が良くないとのことで斷わる。綠風莊は日本風の支那料理店であった。廊下は長く座敷が廣く、氣持ちがゆったりとくつろぐ。河井仙郎〔荃廬〕が續いて到着。この君は篆刻がうまく、しばしば上海に旅し、雪堂叟〔羅振玉〕の舊友であり、久しくその名を聞き及んでいる。かつて高さ一寸ばかりの田白の石材を用意し、京都の書友に依頼して彼に篆刻してもらおうとしたが、その後にその人が亡くなったため、訊ねる手立てがないままであった。今は高齢ゆえに刻印はお斷りしているとのこと。現代の書畫家についての評論が余と多く合致した。とりわけ吳昌碩派を一派としない考えをもつ

ており、鑑賞眼が一般と異なって眞を得ていることが窺われる。

（一）綠風莊は柳原康（綠風）が東京下谷區谷中眞島町一番地に開いた中華料理店。もと美作勝山藩（眞島藩）の下屋敷で、約一萬坪の敷地があった。昭和七年から營業開始。なお、綠風莊はのち芝高輪南町に移轉した。綠風莊については綠風の子息、柳原一日氏の『綠風閣の一日 文人の素顔』（講談社、二〇〇四年六月）を参考にした。

四日

晴れ。午後六時に「楊」鼎甫と北京亭に行く。招待客の圖書寮の宮良（當壯）君、内閣文庫の山田君および田中、樽井が相前後して来る。北平圖書館の古籍印行の件を相談する。この集まりはもともと長澤君が提案したものであったが、なんと急に來なかつたので、一座のもの皆が大變がっかりした。

五日

晴れ。「春秋刑事訴訟法」を書き始める。現代文の文體を用いた。『周禮』『禮記』『春秋』『大戴禮』などの書でおよそ裁判に關係する事なら何もかも入れた。余は以前この體裁で唐律名例を編集し「總則」と改稱した。讀者が便利だというので、今回もこれを踏襲したが、困難とは感じない。ただ資料がやや少ないだけである。晝に勝山「岳陽」が來談。二時に朝日新聞記者の磯部佑治が寫眞師と一緒に來て寫眞を撮り、訪日の内實を詳しく質問し、さらに日本の法律改革について、また余の日本に對する感想を訊ねた。余がおおよその答えを行うと、たち歸って行った。夜になって田中夫妻が三女を伴って來談。余が京

都に行くことを聞いて、とても眞心のこもつた言葉をかけてくれる。本日、「楊」无恙と「劉」錫堂が日光に出かけたまま歸ってこない。

與勝山話柳橋舊游、感賦一律贈之

勝山と柳橋の舊游を話し、感じて一律を賦して之に贈る。

墨隄瑠月滌心胸 墨隄の瑠月 心胸を滌ひ
窈窕河房隱玉容 窈窕たる河房 玉容隱る

賭壁何妨輸酒醜 賭壁何ぞ妨げん酒醜を輸するを
同岑雅合契潮鐘 同岑雅より合し潮鐘に契す

丁娘齒稚人稱麗 丁娘 齒稚く人は稱す麗しと

子夜歌殘夢亦慵 子夜 歌は殘し夢も亦た慵し

幾度昆明尋劫影 幾度か昆明に劫影を尋ぬる

那堪惆悵話前蹤 那ぞ堪へん惆悵として前蹤を話すに

勝山と柳橋で昔遊んだことを話し、感ずるところあつて律詩一首を賦して贈る。

一首を賦して贈る。

隅田川の堤に美しく耀く月は心を洗い、川べりの奥深い部屋に美女が人目を避けている。伶人の歌う詩の數を壁に記し詩名の順位を競つた故事さながらの酒席の遊びに負け、罰杯を飲んででも厭うことはなく、志趣を同じくする我ら二人は平素より意氣投合し、潮水の入り交じつた大川を渡って聞こえる鐘の音を聞いて交わりを結んだ。當時、丁娘を思わせる舞妓は年齢が若く人々は美しいと評判したが、今では子夜のごとき歌妓の歌聲は途絶え、夢見ることも懶くなつてしまった。昆明池に劫火の跡を求めような激しい世變に幾たびも見舞われ、深い悲しみを懷いて昔の事を

話すことは堪えられない。

(1)「賭壁」は、唐代の詩人の王昌齡・高適・王渙之（王之渙）が酒樓に會し、居合わせた梨園の伶人が三人のうち誰の詩を多く歌うかで詩名の甲乙を比べ、その數を壁に畫いたという唐の薛用弱『集異記』に傳える故事を用い、酒席の遊びをいったものと思われ。

(2) 晉の郭璞『贈溫嶠』詩（『文館詞林』卷一五七）に「及爾臭味、異若同岑。義結在昔、分涉于今（爾の臭味に及びては、苕を異にするも岑を同じくす。義結ぶこと昔に在るも、分は今に渉る）」とあり、「異若同岑」は異なった草が同じ山嶺に生えることをいう。後世この詩句に基づき、本質を同じくする友人を「同岑」に喩えて用いることがある。清の厲鶚「寄吳鳴臯」詩（『樊榭山房續集』卷八）に「同岑涉天末、夢去春芳歇（同岑は天末に涉はまにして、夢去り春芳歇む）」とある。「同岑」は、ここでは勝山を指しているものであろう。

(3)「丁娘」は梁の丁六娘という女性をいう。その「十索詩其四（『樂府詩集』卷七九）に「二八好容顏、非意得相關（二八 好容顏、意相關するを得るに非ず）」とある。ここでは柳橋の年若い舞妓をいうのであろう。

(4)「子夜」は東晉の女性、哀切な歌聲で「子夜歌」（『樂府詩集』卷四四）を作ったとされる。ここでは柳橋の歌妓を指す。

(5)「昆明尋劫影」とは、漢の武帝が長安に昆明池を作ったときに灰炭が掘り出されたが、後漢の明帝の代になって上洛した西域僧により、それが天地終焉時の大火（劫火）の燃え残りであると認められた故事（曹毗『志怪』、『搜神記』卷一三など）を用い、時代の激動の跡を尋ねるということ、また激しい世變をいう。本書卷一・民國十六年一月十六日條の「撮影寄玉姬 腰以四絶」其一にも「雙林雪爪從頭認、一例昆明劫影看 雙林雪爪 頭より認め、一例に昆明の劫影として看よ」と詠われている。

六日

晴れ。天氣嚴寒。勝山が來談との約束であったが約束を違えて來なかつた。もともと八日に京都に行くはずであったが、村上〔貞吉〕が

各方面にお別れの挨拶を必要とするということで一日延期した。

七日

晴れ。午前十二時、田中が赤門前の某料理店に招待してくれる。晴靄あ女史（田中夫人）と三女も同席。鐵保が東京に來て第一高等學校に入學したいと志しているので、父親の友人という誼よしみで監督の義務を盡くしてくれるよう彼に頼んだところ、田中は喜んで承諾してくれた。一時に森川町に行き、松岡〔義正〕博士を訪問。たまたま病氣が少し好くなったので、出てきて來客の相手が出来た。また夫人にも會う。博士は病床にあっても物債に關する兩編に注釋を加え出版し通行している。著作の苦勞、これを凌ぐものはない。母上の安否を訊ねてみて、始めて十二月に糖尿病を患い亡くなれたと知った。⁽¹⁾ 一時間ばかり談話して辭去する。博士は杖をつけて玄關まで見送られ、丁重にお別れする。歸途に文求堂に寄って少し腰を掛ける。小川町の水晶堂に行き、昔の女友達の仲子を訪ねる。彼女の娘と會い、仲子が郷里で病の床についていると知った。水晶を少しばかり買ってから戻る。

(1) 松岡義正をかつて訪問し、母堂にも會ったことは本書卷三・民國十六年三月四日條に見える。

八日

晴れ。各方面にお別れの挨拶。大學の各教授、平沼〔祺一郎〕〔樞密院〕副議長、小山〔松吉〕 司法大臣、皆川〔治廣〕 次官、杉〔榮三郎〕 博物館長、外務省重光〔葵〕 次官、坪上〔貞二〕 局長、松本〔丞治〕 博士、

蔣〔作賓〕公使、田中慶〔太郎〕に會う。平沼は三十年來の舊知である。宮中のことで僅かの閑しかなく、個人的な應對が満足に出来ないので申し譯ないという。すこし政治問題に話が及ぶ。「中國當局が『義』『利』の二字を區別し自省してもらいたい云々」との希望を述べる。本日、宿に戻ったのが大變遅く、荷物の點檢を濟ませると夜中の十二時がまわっていた。また村上の爲に東方圖書館への挨拶文を草し、床についた頃はすでに三時であった。

九日

曇り雪。午前九時、急行つばめに乗車して南〔西〕歸する。〔孫〕伯醇が旅行團に加わる。見送りの人は平沼樞密院副議長、圖書寮の鈴木〔重孝〕科長、松本・小野〔清一郎〕・田中三博士、中央大學の秋山〔雅之介〕庶務科長、蔣公使、楊・丁二參事、青年會代表、〔留學生〕監督處代表、田中・勝山兩夫妻および留學生多數、一時の盛を極める。發車して握手してお別れする。一行の者、七號車に入る。晝食はとても美味であった。名古屋を過ぎそれより南〔西〕は雪が非常に深かった。四時四十餘分に京都驛到着。狩野〔直喜〕・倉石〔武四郎〕・吉川〔幸次郎〕・三浦・小林〔忠治郎〕父子が出迎え。またも長谷川旅館の雙佳樓に投宿。ここは余が題署した額がある。夕食の後、小林の母上に會う。年は八十五の高齡ながら健康。余と小林は兄弟の間柄であるので、とても篤くもてなされる。夜、古梅園に行き墨を買う。それから佐々木書店〔竹苞樓〕に行き古書を買った。元刊本の宋の高宗『草書集韻』だけがまずまずの佳本であったが、残念なことに僅か三冊の

殘本であり、価格が大變高いので購入しなかった。

(1) 『草書集韻』は『四庫全書總目』卷一四・子部藝術類存目に「草書集韻五卷、内府藏本」と著録され、「編輯者の名氏を著さず。漢の章帝以下、元人に至るまでの草法を取り、韻に依り編次す。每字の下、各おの其の人を注す。其の編次は『洪武正韻』を用ひ、蓋し明人の作なり」と解題が加えられている。また胡彥・丁治民「《草書集韻》與《草書韻會》二者之關係及其版本辨證」(『文獻』二〇一一年一〇月第四期、總第一三〇期)によると、『草書集韻』は金の張天錫の編した『草書韻會』を底本にして刪補修訂したものという。『草書集韻』は明代の編纂書であるから南宋の高宗の編著ではない。高宗の書とされる同類の書としては『草書禮部韻寶』がある。董康が竹苞樓で見たのは『草書集韻』ではなく、『草書禮部韻寶』であったと思われる。ちなみに『草書集韻』は明の成化十年(一四七四)蜀藩刊本が臺灣の國家圖書館に所藏され、また北京の中國國家圖書館や天一閣に殘本が藏されている。北京本の下平聲と去聲の二卷は『四庫全書存目叢書』に影印された。『草書禮部韻寶』は元刊覆宋本が靜嘉堂文庫・大東急記念文庫および臺灣の國家圖書館に所藏されている(三種が別版であることは阿部隆一『増訂中國訪書志』、汲古書院、一九八三年三月、頁四二二に指摘されている)。また延享四年(一七四七)刊の覆元版の和刻本もある(早稲田大學圖書館所藏)。

十日

曇り。一行の者、高野山を遊覽。晝前に電車の停留所に集合と決める。十時に余は楊鼎甫、孫伯醇、小林および彼の長男の長文と一緒に狩野博士を訪問し、一時間ばかり談話。ついで大阪毎日新聞社京都支局に行き、局長の岩井武俊および藤田信勝、城南健三に會う。岩井君は高野山親王院の住職の水原堯榮をよく知っているのので、電話で宿の準備を頼んでもらった。新聞社の者が我々のために寫眞を撮ってくれ

る。お別れしてから同行の者達と合流。電車に乗って大阪に行き、自動車に乗り換えて難波に向かう。南海食堂で晝食の後、電車に乗って南へと向かう。以前、小林とはぐれた場所であった。⁽¹⁾小林がその思い出を話すと、ありありと目に浮かんだ。途中で吹雪となり、窓に近づいて遠くを眺めると白瑠璃の世界であった。

三時半に極楽橋に到着。ケーブルカーに乗り換る。山登りには自動車よりも容易である。女人堂に到着。多くの人々と参拜。この時、手のひらほどもある雪が降る。道は雪に覆われ、それと分からなくなる。また人力車に乗って親王院に着く。すでに真つ暗なのに電燈が明るくない。風雪に見舞われる度に電線に障碍が起こってしまうのである。大きな蠟燭を二本燈し、爐を焚きつけて（火鉢に炭をつぎ）暖を取る。水原住職は先だって杉「榮三郎」博士の紹介状を受け取っており、出て應對される。訊ねてみると『文館詞林』はなおも靈寶館に收藏されているが、館の主任が避寒のため下山しており、すでに閉館中と分かって、至極残念であった。ただしこの山は東方第一の靈境で、雪を冒して山に遊覧したことは非常に楽しいことではあった。夕食はすべて精進もの、味つけが頗るいい。蠟燭の芯を切って夜話を始めようとする、電燈が急に明るくなった。同行の者が拍手して喜ぶ。住職が余を招き客間に案内され爐（火鉢）を圍むと、すぐに余に著書二冊を贈呈。いずれも高野山の歴史に關するものであった。また内藤「湖南」と亡友「西村」天囚の手跡を取り出し鑑賞に供する。最近の人の墨跡ではあるが、弘法大師に近づき、これと拮抗するほどで、これらも將來、山門にとって掛け替えのない寶物となるであろう。伯醇と无

恙はそれぞれ燈のもとで繪を二枚描く。伯醇は當山の雪景、无恙は青松紅燭、極めて逸趣に富む。本日、寒暖計は氷點下を示し、したたる水は氷となる。それでも余だけは入浴が出来たが、他の者はその勇氣がなかった。

(1) かつての高野山行きの乗車で小林とはぐれたことは、本書卷四上・民國十六年四月二十二日の條に見える。

十一日

雪がしんしんと降り續く。深さ約二、三尺になる。朝食が終わると、水原住職があちこちの名勝古跡を案内してくれる。金堂は金山で最も莊嚴な區域である。先年、火事に遭い、寄附を募って再建され、竣工間近かであった。以前よりも壯麗で、柱の太さは一抱えほどもあり、五寸四方の金箔が二層に貼られている。この經費だけですでに恆河の砂の數の如く莫大な金額になる。ついで金剛峰「寺」に至り茶を飲む。道順通りに進んで奥の院に参拜。雪を踏んで山を登り、前回の旅行よりも頗る楽しい。同行の者と一の橋で寫眞を撮る。余はまた伯醇と淀君の墓で寫眞を撮り、美人を慕う思いを示した。「豊臣」秀次の死は讒者の所爲ではあるが、その内幕としては實のところ淀君の生んだ秀頼によるものである。最後には度々、徳川氏に破れた。命を奉じて高野山に墓が安置されたが、結局、母子は自殺を遂げた。これも因果の報いである。途中には明智日廣（日向）守光明（光秀）の墓がある。彼が主人の織田信長を弑殺した人物である。聞くところによると、その遺族が何度か修理しても、石欄（玉垣）が勝手に割れてしまうとい

う。彼のような行爲は人から唾棄すべきものと見なされるだけでなく、大地さえもこれを厭うのである。

午後二時に院に戻って食事の後、供養料百圓を出して亡母唐太夫人および博陵君（亡妻）のために永代供養堂に位牌の安置を行い、さらに三十圓を出して金壽繪の位牌を作り、住職に毎日お経をあげ、冥福を禱ってもらうことにした。余は前回、秀次の墓に行かなかったのを残念に思っていた。住職は余が遊興に満足していないのを見てとって、使用人に命じて雪かきにやらせ、毎日新聞記者の城南健之（三）に余のお供をさせ一緒に行かせた。墓は大變小さい。わずかに高さ一尺ばかりの石標が一つあるだけであった。父の豊城（豊臣）氏の威勢を恐れたからである。切腹の時は壮烈であったが、修理してやる人がいない。墓の向かいに良助（道助）親王墓がある。四時半に女人堂に至る。自動車が進んでおり、錫堂と伯醇が先に乗車したが、次の車の到着を待つことにした。住職などの人たちと別れ、乗り込んで下山。ケーブルカーに乗り換え、もとの道を引き返す。また難波で夕食。京都に着いた頃には十一時がまわっていた。この日、京洛の地は寒かったが、すこしも雪を見なかった。

（一）豊臣秀次の切腹について、董康は本書巻四下に「秀次公小冊子」（後掲の井村氏著書）から翻譯して「記秀次切腹事」を掲載している。

（二）豊臣秀次の墓所は光臺院の境内にある（井村米太郎『秀次公』、著者刊、大正十年十一月三版による）。後白河天皇の第二皇子の道助親王が光臺院に住し、光臺院御室と稱せられ、寶治三年（一二四九）に當院にて薨去し、陵墓が光臺院の後山に設けられた（松坂青溪『靈山高野』、總本山金剛峰寺、昭和十八年四月、頁八九を参照）。「良助」は「道助」の誤りである。

十二日

晴れ。朝食後、皆で小林の御母堂に会いに行く。小林が我々の寫眞を撮ってくれる。單獨あるいは集合で撮影し、記念とした。皆と居續けて晝食。一時頃、伯醇・鼎甫・小林とともに自動車をやとって瓶原村に行き〔内藤〕湖南を訪問。ここには木津川があり、小型船が航行できる。四方を山に丸く圍まれ甕のようであるので、甕原村とも呼ばれる。湖南は山腹に椽數本の質素な家を築き、恭仁山莊と名づけた。

恭仁京の舊跡に屬するのに因んだものである。折りから湖南は病氣で臥せており、我々をベッドの側にまねいて清談した。余が來ることを知って、古典籍を用意して待っていてくれた。そのうち藤原朝の寫本の『古文孝經』と『周易』單疏本は最近、五百圓で田中〔慶太郎〕から入手したものである。また莫子偲（莫友芝）舊藏の唐寫本『説文』木部を出して、余に題跋を書かせた。余は書が上手でないので固辭したが、斷りきれず澁しぶ四行を後ろに書き附けた。湖南は余を文化財侵略の大將であると咎めた。余にはこれほどの財力は具わっていない。しかし自問してみると、宣傳の功績は無くはない。もし祇教の牧師になぞらえたとしても、もとより耻じることはない。

四時半にお別れを告げる。近くの某小學校（恭仁尋常高等小學校）に行つて恭仁京の宮殿（大極殿）の舊址を訪ねよと言いつかる。着いた頃にはすでに薄暮であった。大きな礎石が乾の方角（西北）に一つあった。その上は六、七人も入れるほどであり、柱の巨大さが推し量られ、さらに宮殿の廣さも窺い知られる。順序よく瓦が陳列されていた。文様には「大伴」「國分」「出雲」「我【原注：反文（鏡文字）】」

などの文字があった。⁽⁵⁾ いずれも藤原、鎌倉、室町、新安(平安)、奈良朝の物である。ここに七年間、都を置いたが、たびたび地震が起こったために、ようやく京洛に歸還したという。⁽⁷⁾ 旅館に歸った頃はすでに八時であった。伯醇に神戸から電報があり、家族が東來との知らせ。明日の晩に「東京に」引き返すことに決めた。

(1) 董康がいう「藤原朝」は、いわゆる藤原時代、平安時代後期に當たるであろう。後文の「藤原」も同じ。

(2) この『古文孝經』と『周易』單疏本は、『新修恭仁山莊善本書影』(財団法人武田科學振興財團、昭和六十年五月)に収録され、前者は重要文化財の指定を受けた仁治二年(一二四一)清原教隆校點本であり、書影圖版頁一三六・一三七、解説頁七〇〜七二に見える。後者は「周易正義」として書影圖版頁一四七、解説頁八四に掲載されている。山鹿誠之助氏による「周易正義」の「解説」には、「蓋シ南宋覆刻本ヲ傳鈔セル本ニ據リテ書寫シタルモノト想ハル。……本書ハ書寫竝ニ傳來等ニ關する與書ヲ存セズ、然レドモ書寫年代ハ織豊期ト推セラレ、恐ラクハ元龜天正ヲ降ルモノニアラザルベシ」とある。これによれば『周易』單疏本は、董康が記すが如き「藤原朝」すなわち平安後期の寫本ではない。

(3) 莫氏舊藏の唐寫本『說文』木部は、『新修恭仁山莊善本書影』に「國寶說文解字木部殘卷」として収録され、書影圖版頁三〇〜一〇(巻頭口繪カラー寫眞にて全卷掲載)、解説頁五八〜六二に掲載されている。莫氏、名は友芝、子偲はその字。嘉慶十六年(一八一二)生まれ、同治十年(一八七二)卒。貴州獨山の人。この『說文』の殘卷を有し、同治二年にこれを摹刻し、自撰の「唐寫本說文解字木部箋異」を附して公刊した。他に「宋元舊本書經眼録」「邵亭知見傳本書目」などの著があり、近年には『莫友芝詩文集』が編集校點され、出版された(人民文學出版社、二〇〇九年一月)。なお生平は張劍『莫友芝年譜長編』(中華書局、二〇〇八年一月)に詳しい。(4) 董康の題跋四行は『新修恭仁山莊善本書影』圖版頁一〇に、「甲戌一月借壽州孫澁新會楊維新訪／湖南先生於恭仁山莊出示此卷誠驚人秘笈康與先生互稱文化侵略但此卷已編入國寶侵略無從／矣歎題數語以誌眼福 毘陵

董康(甲戌一月、壽州の孫澁(孫伯醇)・新會の楊維新(楊鼎甫)を偕ひ、湖南先生を恭仁山莊に訪ぬ。此の卷を出し示さるるに、誠に人を驚かしむる秘笈なり。康は先生と互ひに文化の侵略と稱す。但し此の卷已に國寶に編入せられ、侵略從ふ無し。敬んで數語を題し、以て眼福を誌す。毘陵の董康」と見える。なお山鹿氏の「解説」には、本卷は「昭和十年國寶ニ指定セラレタリ」と記されている。董康が國寶指定の一年前、ここに「已編入國寶」と題するのは、指定の内示を湖南から聞いたからであろうか。

(5) 恭仁京址から出土した瓦文字を早くに紹介した岩井武俊「京都の金石文(五)」(考古學雜誌)第參卷第六號、大正二年二月)に、「今同地(筆者注：瓶原村)小學校藏する古瓦を見るに唐草瓦巴瓦平瓦數種あり、その巴瓦唐草瓦に、「國分寺」と識せるは元より平瓦面に識せる陽文に至りてはその左文字としては、「眞依」「六人」「宗我」等とし、その右文としては「大伴」「刑部」「古□」等あり、筆意、筆力古雅雄健天平經寫體に同じく亦昔時追憶の情を切らしむ」という。董康が瓦の文字として挙げたもののうち、「國分」は山城國分寺の瓦當であろう。また「我」(また岩井氏のいう「宗我」)の鏡文字(左文字)は、元來は「宗我部」という文字瓦の斷片と思われる。後年の發掘にかかるが、恭仁宮跡發掘調査報告「瓦編」(京都市教育委員會、一九八四年三月)頁七九の「恭仁宮跡出土文字瓦一覽」に「K103A宗我部」「K107出雲」「K108大伴」として見え(また圖版第三五、「國分寺」と記された瓦當も圖版第四に掲載されている)。

(6) 恭仁京は奈良時代に屬すので、「奈良朝」の前に擧げる「藤原」以下の四時代は董康の誤認。また「新安」は「平安」に訂正すべきである。(7) 恭仁京は天平十二年(七四〇)十二月丁卯(十五日)に始まり、天平十六年二月庚申(二十七日)に難波宮遷都をもって終わった(『續日本紀』卷一五・一六)。三年余の都であったので、「七年」とあるのは誤り。また地震の頻發による遷都は、天平十七年五月戊辰(十一日)に行われた難波宮からの平城遷都であるので(『續日本紀』卷一六、「京洛に歸還(原文「還回洛)」というのも誤り)。

十三日

晴れ。午前十一時に狩野博士が倉石と一緒に迎えに来てくれ、講演

會に出かける。倉石は余に明版の殘本『剪燈新話・餘話』を示す。余が以前刊刻した版本⁽¹⁾と異同があると聞いた。また百卷本の李卓吾評本『水滸傳』は惜しいことに十一卷から三十卷が残るものであったが、余は併せて借りた。狩野と余は『水滸傳』と『紅樓夢』の人物を評論した。余は『水滸傳』の宋公明（宋江）については善し惡しを加えることがない。金聖嘆は極端に攻撃しているが、至論とは見なせぬ。しかし第一流の人物は林教師（林冲）とすべきである。『紅樓夢』に關しては、評者は皆、林（林黛玉）を褒めて薛（薛寶釵）を貶め、そのうえ薛をうわべは柔和でだが内心は人をだますような奴と非難している。余はかつて脂硯齋主人第四次定本を閲讀すると、注に「林・薛は一人に屬す」とあった。脂硯齋主人とは「曹」雪芹の號であり、實は怡紅公子の別名である。作品中に薛の美しさは仙女のごとく描寫されおり、蔑視するに忍びない氣持ちにさせるが、その感情の描寫は深閨の娘の態度を脱していない。ひとえに虚構の筆致をもって描き出し、二人を作中に設定したのである。私は寶兒（薛寶釵）に傾倒する人のほうが必ず鬻卿（林黛玉）よりも多いと承知している。狩野は余の言に強く賛同した。狩野は公羊家の學說に詳しく、法制關連の各條をあまねく指摘したが、すべてすでに余の『春秋刑制考』に取り入れられていた。

午後一時ごろ、倉石君が再びやって来て余を會場に案内。講演の題名は「追憶前清考試制度」とした。⁽²⁾倉石が通譯をしてくれた。聽講者は約百五十人。大學の總長および諸教授たちといった面々で、余と知り合いの者が三分の一もいた。湖南も病を押して瓶原から来てくれ

た。またオランダ中國擔當局顧問の細部安郎もおり、夫人と同席していた。七時に伯醇・鼎甫と共に宴會に出て晚餐⁽³⁾。

(1) 董康が民國六年（一九一七）に慶長古活字本を底本にして刊刻し、「誦芬室叢刊」第二編のうちに収録した明の瞿佑『剪燈新話』、李昌祺『剪燈餘話』を指す。

(2) この「脂硯齋主人第四次定本」は、董康がかつて所藏した『紅樓夢』の早期の鈔本『脂硯齋重評石頭記』である。この本には「脂硯齋凡四閱評過」と題署されているので、董康は「脂硯齋主人第四次定本」と稱したのである。また「己卯冬月定本」という紀年が見られるところから、この本は『紅樓夢』の「己卯本」と呼ばれている。「己卯本」は董康の後、姻戚の陶洙に轉じ、現在は國家圖書館の所藏に歸している。一九八〇年に上海古籍出版社から影印されたほか、「古本小説集成」にも再覆製して収録されている（ともに歴史博物館所藏部分も並收）。

(3) 「怡紅公子」とは賈寶玉が林黛玉・薛寶釵などと結んだ海棠詩社における彼の名前。寶玉は大觀園の怡紅院に住んでいたことに因んで林黛玉が命名したことが『紅樓夢』第三十七回に見える。この一文によれば、董康は脂硯齋主人を『紅樓夢』（八十回までの）の作者である曹雪芹と同一人と見なし、さらに小説の主人公は作者をモデルにしたものであると考えていたことになる。

(4) この講演内容は「東方學報（京都）第五冊（昭和九年七月）」に「追記前清考試制度」として掲載された。京都大學人文科學研究所に前身の東方文化學院京都研究所による昭和九年の油印本が藏せられ、それにも「追記前清考試制度」とある。また『日本講演錄』（關西大學内藤文庫所藏本）にも同題で収録されている。

(5) 「東方學報（京都）第五冊の「彙報」に「董康氏の講演」と題する以下の記事が掲載されている。

此の講演會は一月十三日午後一時半より研究所の講堂にて開催、狩野所長の紹介の後董氏は「前清考試制度」と題して、倉石研究員の通譯の下に、前後二時間半に亘り、其の蘊蓄を披瀝せられた。來會者評議員、研究所關係者其他百二十余名に上り盛會であった。講演の内容は氏の手記を得て本

冊に載せられたからこゝには省略する。

此の日午後六時から都ホテルに於いて同氏の歓迎の宴を催し、研究所から狩野・内藤・羽田諸博士はじめ各評議員研究員出席、主賓の董氏並に同行の北平圖書館員楊維新氏を中心として一同歡を盡くし九時半散會した。

十四日

晴れ。午前十時、狩野が東方研究會を代表してお禮の挨拶。二時間、話して歸る。手紙を書いて田中、鈴木に差し出す。午後二時、同行の者と嵐山に遊ぶ。龜山に登る。ここは晩秋の紅葉で名を馳せている。今はその時期ではないが、高木の間から向かいを見ると、山氣を帯びた陽光が深綠色になり、これまた天然の繪畫である。山に階段があった、頂上に登り詰め、川の流れを下に眺めると、筏がつながれて下っていく。數人がかりでその上で支え、一日で大阪までたどり着ける。山氣が衣服に染み付いて小糠雨にあつたようで、冷え込んで長くいられない。山を下りて小督の局の墓を通り過ぎる。絶句二首を後に記す。ついで金閣寺に到着。庭園の位置は洛中隨一である。一石一木にみな謂われが書いてある。余は以前から東山が好きであつた。至る所、山林溪谷の美を擅にしているからである。その間に小さな家を建てる時、その美しさをすべて吸収でき、自分の所有物となつた。⁽¹⁾昔からこの寺の建物はたいそう氣に入つていた。歸途に小林の別荘に行く。これも東山の地域内にあつて、窓を開くと比叡の連峰が手にとれるかのようにである。惜しいことにすっかり暗くなつていたので、それと見分けられなかつた。ただ下方の家々の明かりを俯瞰するだけであつた。小林が畫帖を出して見せた。中に松籬(吳昌綬)が余の東山寄廬に題

した詞があつたので、これを書き取つて歸つた。

嵐山道上有古塚、大僅如拳、碑題小督局墓、弔以二絶。

嵐山の道上に古塚有り、大いさ僅かに拳の如く、碑に小督局の墓と題す。弔ふに二絶を以てす。

〔其一〕

嵯峨歲月幾經過 嵯峨の歲月 幾たびか經過する

夢裏君王雨露多 夢裏 君王 雨露多し

蘭珮終貽湘水恨 蘭珮 終に湘水の恨みを貽るも

勝他遠嫁慘笳歌 他の遠く嫁して笳歌に慘ふるに勝る

〔其二〕

玉鉤一掬古苔侵 玉鉤もて一たび古苔の侵すを掬ふ

霸業平家蹟可尋 霸業の平家 蹟尋ぬべし

縱使胭脂逃鉅劫 縱ひ胭脂をして鉅劫より逃れしむるも

香魂依舊怨韓禽 香魂は舊に依り韓禽を怨まん

嵐山の路邊に古塚があつて、大きさはわずかに拳ほどで、墓碑には「小督局墓」と記されている。二首の絶句を詠んで靈を弔つた。

〔其の一〕

嵯峨での歲月はどれほど經つたことか。夢の中では君王から厚い寵愛を承けることしばしばであつた。芳草を帯び玉にし「高潔に身を守つてはきたが」、ついに「君王の死に遭い」湘水に臨んで恨みの思いを抱くことになつた。しかし遠く「匈奴に」嫁して胡笳の歌に悲しみを託すよりも優つた境涯と思われる。

〔其の一〕

玉で作った鈎で墓石を蔽う苔を取り除いてみると、霸業を興した平氏の足跡が偲ばれる。「南朝の陳の遺跡」胭脂井が時代の激しい変動から破壊を免れたとしても、女性の魂は昔と變わりなく國を滅ぼした韓禽將軍を怨み續けているであろう「これと同じように小督局は、平家のために憂き目に遭ったことをいつまでも怨んでいよう」。

附小督局傳

小督局は、高倉帝の寵妃なり。權中納言藤原成範の女【原注(以下省略)：長門本平家物語に曰はく、藤原通憲の季女にして、三條小河に居る。故に小河殿と號す、と。】琴を善くし、姿色有り。是に由りて宮に入り大いに寵せらる。建禮門院の寵稍々弛む【平家物語に曰はく、葵の前卒し、帝甚だ哀慟す。中宮乃ち小督を納れ之を慰ましむ、と。未だ孰れが是なるかを知らず。】初め小督の家に在りし時、清盛の婿の藤原隆房に通ず。宮に入るに及ぶも、隆房、眷戀して已まず。清盛、中宮の寵衰ふこと、又隆房の憂鬱、皆小督に因るの故、之を殺さんと欲す。小督、潜かに宮を出で、嵯峨の民舎に匿る。帝、北面の士の源仲國に命じ之を索めしむ。仲國、單騎にして嵯峨に至り、遙かに琴聲を聞き、從ひて之を得て宮に回る。寵愈いよ渥く、坊門院を生む。清盛、之を聞き怒り、捕へて以て尼と爲す。時に年二十三【長門本平家物語に曰はく、清盛、宮に入りて小督を引き出し、其の美を視るに心動き、耳語して已まず。小督從はず、清盛大いに怒る。其の耳鼻

を截り、命じて尼と爲し之を放たしむ、と。】。帝、憂憤して病を發して崩す。後、小督は大堰川に投げ死すと云ふ【大日本史】。

風入松

松鄰

董授經兄遊京都、新營吉田山居。寫眞寄示、率賦此闕。昌綬、辛亥冬、駐居庸南口、兄屢來相訪。展畫如觀舊遊。而吉田遠近、山樹蔥蔚、風景尤勝。恨不得移家過從。

董授經兄、京都に遊び、新に吉田の山居を營む。寫眞もて寄せ示し、率に此の闕を賦す。昌綬、辛亥の冬、居庸の南口に駐し、兄屢しは來り相訪ぬ。畫を展ずるに舊遊を觀るが如し。而れども吉田の遠近、山樹蔥蔚として、風景尤も勝る。恨むらくは家を移し過從するを得ざるを。

脩然塵外識君廬 塵外に脩然として君の廬を識る

山翠吉田居 山は翠なり吉田の居

中原劫火匆匆過 中原の劫火 匆匆として過ぎ

已侵尋海涸桑枯 已に侵尋して海涸れ桑枯る

旅逸暫容遊釣 旅逸 暫く容に遊釣すべきも

行吟漫誤樵漁 行吟 漫りに樵漁を誤らしめん

相從襪被記應無 相從ひ襪被すること記すること應に無かるべし

小別隔年餘 小別 年餘を隔つ

重關一握征車迅 重關に一たび握り征車迅く

想嵐痕樹影還如 想ふ嵐痕と樹影に還つてに如たる

贖我紅兒讀曲 我が紅兒の讀曲を贖すも

輸他緑子鈔書^① かの緑子の鈔書に輸す

風入松

松郷（吳昌綬）

董授經（董康）君が京都に行き、最近、吉田に山居を構えた。寫眞でその様子を傳えてきたので、急いでこの詞を作った。昌綬は、辛亥（宣統三年、一九一一年）の冬、居庸關の南口に駐屯していた頃、彼がしばしば來訪してくれた。畫帖を開いてみると往年の交遊を見るようである。しかし（居庸關邊りとは異なつて）吉田の遠近は、山の樹木が鬱蒼と茂り、風景が非常にすばらしい。家を移して付き従うことができないのが残念である。

董康君の住まいは世俗から超然としてゐることを知った。綠樹に圍まれた吉田の山居である。中原の地に變革の混亂が忽ちのうちに過ぎ行き、すでに進展して世情は激變の様子を示している。旅人として氣ままにふるまつて暫くのあいだ釣りに興じられるのがよく、水邊を歩いて詩を吟じていると樵や漁父をだまして「屈原である」と誤解させてしまふであらう。

かつて「居庸關の南口に駐屯していた頃」私の旅先にまで足を運んで下さったことはきつと憶えておられまい。お別れして何年も経つた。堅固な關門で握手して後、旅人を乗せる車は疾走し、「お姿は」山氣の名残や樹影のように「はかなく」想像されるばかりである。私の歌妓に戯曲をたくさんに讀ませても、緑子女史が古籍を書寫するに負けてしまふ。

(1) 董康は辛亥革命後、京都に難を避けた。本書卷四下・民國十六年（一九二七、昭和二年）四月二十六日條によると、東山に居宅を構えたのは民國二年（一九一三、大正二年）のことであり、現京都市左京區の吉田神樂岡に位置し、敷地「僅かに二百余坪」、「翠峰環抱し、檻外の萬象、悉く我が有と爲り、天然の勝地なり」とその様子を述べている。ただし、その年の内に歸國した。

(2) 董康の東山山居の畫帖に松郷（吳昌綬）が詞を書き附けたことは本書卷四下・民國十六年（一九二七、昭和二年）四月二十六日條に、見える。

(3) 「雨露」は恩恵を喻えたもの。ここでは小督局が高倉天皇から賜つた寵愛。明の王世貞「陽春曲」（《弁州山人四部稿》卷六）に「君王雨露在一身、那得徧灑東門塵（君王の雨露一身に在り、那ぞ徧く東門の塵に灑ぐを得ん）」とある。

(4) 「蘭佩」は蘭（ふじばかま）を佩玉のごとく腰に帶び、身を清らかにすること。「蘭」は辟邪・淨化の效力をもつとされる香草。「楚辭」に頻出して高潔な徳、また君子を喻えることがある。「佩」は佩に通じる。「蘭佩」は、「楚辭」『離騷』の「扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以爲佩（江離と辟芷とを、扈り、秋蘭を紉りて以て佩と爲す）」とあるのに基づく。

(5) 「湘水恨」は、古代の聖天子の舜が南征して蒼梧の野で歸らぬ人となり、従い來たつた二妃も湘水（現湖南省を南から北に流れ洞庭湖に注ぐ川）のあたりで亡くなつたという故事（『列女傳』など）に見える。また『楚辭』『九歌』の「湘君」「湘夫人」は二妃を歌つたものとの解釋がある）を用い、崩御した高倉天皇に對する小督局の悲しみをいう。「湘水」は小督局の塚の前を流れる大堰川に見立てたもの。

(6) 「遠嫁修笄歌」は、後漢末の蔡琰（字文姬）の故事を用いた表現。大學者の蔡邕のむすめ蔡琰は、未亡人となって實家に歸つてしたが、天下の喪亂に遭遇、南匈奴の侵略によって連れ去られ、左賢王の妻となつて胡地にあること十二年、二子を儲けた。後、曹操の力によって贖われて歸還を果たし、董祀に重嫁した。事は『後漢書』列女傳に見える。また「胡笳十八拍」（『樂府詩集』卷五十九など）は蔡琰がその數奇の人生を歌つた作とされる。

(7) 「胭脂」は頬紅をいうが、ここでは南京の鷄鳴寺の奥に今も遺る「胭脂井」を指す。胭脂井（景陽井ともいう）は、南朝の陳が滅亡する際、亡國の天子陳叔寶が愛妃の張麗華・孔貴嬪とその中に入って隋兵から逃れようとし

たという井戸。

(8)「香魂」は女性の魂。「香」は女性に屬するものを表す。唐の韋莊の絶句「合歡蓮花」（『浣花集』卷二）に、「虞舜南巡去不歸、二妃相誓死江湄。空留萬古香魂在、結作雙葩合一枝（虞舜南巡して去きて歸らず、二妃相誓ひて江湄に死す。空しく萬古に留まり香魂在り、結びて雙葩と作り一枝に合す）」とある。

(9)「韓禽」は隋の將軍の名。韓擒虎（唐代では高祖の祖父の諱虎を避けて韓擒と略した）ともいう。彼は南朝の陳を攻め滅ぼす先鋒となり、陳の後主の陳叔寶を捕らえ軍功を擧げた。清の王士禛『漁洋詩話』卷中に「青谿故有張麗華小祠、金陵圖經不載。余少時、客秦淮、賦雜詩二十餘首、而獨遺此。因補賦二絶句云、（第一首省略）臨春結綺已消沈、遺廟荒涼碧鮮侵。惟有青谿鳴咽水、千年猶自怨韓禽（青谿に故張麗華の小祠有るも、『金陵圖經』は載せず。余少かりし時、秦淮に客たりて、雜詩二十餘首を賦し、而れども獨り此を遺す。因りて補ひて二絶句を賦して云ふ、……春に臨みて綺を結ぶも已に消沈し、遺廟は荒涼として碧鮮侵す。惟だ青谿の鳴咽の水有るのみにして、千年猶ほ自ら韓禽を怨む）」とある。

(10)「劫火」は、佛教で末世に起こるといふ世界を焼き盡くす大火のこと。ここでは辛亥革命による混亂を指す。

(11)「海涸桑枯」は世の移り變わりが甚だ激しいことをいう。仙女の麻姑が仙人の王遠（字方平）と前に相會うてから「已に東海の三たび桑田と爲るを見る」といった故事（『太平廣記』卷六十引『神仙傳』）に基づく。これから「滄海桑田」の成語が生まれた。南宋の劉辰翁「念奴嬌（酬王城山）」詞に「滄海桑枯」の句の用例が見えるが、ここに「海涸」というのは世變の甚大さをより強く表している。

(12)「行吟漫誤樵漁」は、『楚辭』漁父を典故にした表現。楚王に放逐され江湘の間に流浪する屈原は、「澤畔に行吟し」ていたところ、漁父に出會って處世を諭されることがあった。漁父は隱者とされ、また「樵」も同じく隱者を意味する。この一句は、中國から日本に亡命した董康が屈原のように見なされることをいったものと思われる。

(13)「襜被」は衣服と夜具を包むことをいう。往時、中國では旅行には夜具を攜行したので、「襜被」は旅装を整える意味に用いることがある。

(14)「贖我紅兒讀曲」の「贖」字の意味は難解。この句は、本書卷四下・民國十六年四月二十六日條には「媿我紅兒度曲（媿づらくは我が紅兒の度曲

〔作曲の意〕」に作り、句意が分かりやすい。「紅兒」は、杜紅兒という歌に巧みな唐代の名妓（唐の羅虬「比紅兒詩」に見える）。後世これに因んで歌妓を廣く指して「紅兒」という。

(15)「綠子鈔書」の「綠子」は、民國二年（一九一三）に董康が吉田山の邸宅にいた頃に備った女性。「大家の風範」を有するほど楷書に巧みで寫本の役目を仰せつかった藤田綠子のこと。卷四下・民國十六年四月二十六日條の拙譯注を参照されたい（『就實語文』第十九號、頁一〇八。また頁一二七に藤田綠子の肖像を載せた）。

（立命館大學文學部教授）